

レンマがここにある。ハーンは自分の共感を伝えようとした読者から見放され、柳は自分が共感をむけた朝鮮において拒否された。同様の境涯を今日もっとも熾烈に生きている作家のひとり、先日来日したV・S・ナイポールを数えることも許されよう。

トリニダード・トバゴのインド系家庭に生まれ、イギリスで教育を受け、近年爵位を得たこのノーベル賞常連候補者は、近著『インド——無数の騒乱にある現在』(1990)などでの辛辣な筆致が、そこに描かれた人々の側に立つ(と主張する)批評家たちによって、痛烈に批判されるに至っている(岳藤友治訳では、副題が「大変革の胎動」と肯定的な用語に変えられている)。共感を看板にして、観察した事態を誠実に描くことが良心の証しとなる時代は、とうに終わった。自らのルーツでありながら、そこから疎外されている、というこの作家のインド社会に対する愛憎そのものに、「書くこと」の倫理があらためて問われている。日本での講演でこの作家が見せた居心地の悪さと痼癩と。そこには悪意と無関心との板挟みに苛まれる表現者の真実が露呈した。それは今日作家であることの困難の、赤裸々な披瀝ではなかったか。

連載④

V・S・ナイポールの苛立ち

文化をまたぐ「書き手」の不機嫌について

国際日本文化研究センター 研究員

稲賀繁美
Inaga Shigemitsu

小泉八雲ことラファディオ・ハーンは、日本を共感をもって描いた英語作家として知られている。すでに西インド諸島で口誦伝承を採取する経験をもっていたハーンは、未知の国、日本を発見するにつれ、その知られざる於母影を描いていた。そこには日本人が忘れていた姿、失われようとする習俗が描きとめられた。しかしこうした共感ある日本描写は、その後、欧米の日本学者によって否認された。ハーンの描いた日本は、ことさら情緒的に理想化され、牧歌的に誇張された、非科学的な感情移入過多な眉唾もの、と貶められてきた。

そのハーンが日本の心を司る大切なものとして注目した神道は、しかし日本による朝鮮半島の植民地政策によって、半島の人々に強制された。そうした日本の横暴を正面から批判した例外的な知識人に、柳宗悦がいる。かれはそれまでさして重視もされなかった李朝の白磁のなかに、無名の匠の手による無垢な美を見いだし、その色彩と線に、異国によって蹂躪されつづけてきた半島の民の悲哀の表現を把えた。だがこの朝鮮への共感に満ち、その歴史に同情する姿勢は、皮肉にも何人かの朝鮮知識人によって、ゆゆしき誤解として拒絶されるに至った。

文化を跨ぐ文筆活動のシ